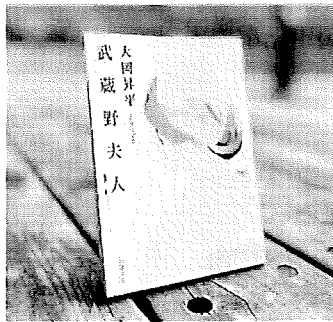


復員兵の帰還に焦点

文人の 武蔵野

大岡昇平の長編小説「武蔵野夫人」(1950年)には、今やそのタイトル自体に戦後文学の代表作としての風格が備わっていると、著者の思い込みが著者の当初の心づもりとしては、あえて国木田独歩の「武蔵野」と同じタイトルにして「やつつけてやるつもり」があった

大岡昇平 ③



大岡昇平「武蔵野夫人」(武蔵野市で)

ようです。編集者の意向にしたがって「武蔵野夫人」にタイトルを変更した大岡は、後の対談で「やっぱり独歩は強いんだ」

とこぼしてみせますが、対談相手の増谷雄高は「でも『武蔵野夫人』の題は良かったよ」と返しています。それに対して大岡は、「主人公が通り過ぎていくことで二つの家庭が壊れていく、というテーマで、あわはもと、『夫を愛し得ない女たち』というキザな題があったんだよ。つまり姦通小説だ。おれの若い頃からの経験で、多くの我慢してる女性を知っている。ちょうどこの時、姦通罪が消滅したんだよ」と明かしています。

大野家の「夫人」に娘の家庭教師を頼まれ、秋山家に下宿し、秋山家の「夫人」(勉のいとこ)と恋情を交わします。夫の秋山もまた近所の大野家の「夫人」に接近し、愛読するフランスの「姦通小説」を教科書にした「姦通」を実行しようとしています。「二つの家庭が壊れていく」の「二つの家庭」というのは秋山家と大野家を指します。

「『夫を愛し得ない女たち』というキザな題」も腹案として持ちながら最終的には「武蔵野夫人」という題を受け入れたのですから、武蔵野夫人が主人公であってもいいと思うのですが、武蔵野夫人たちを動かす「劇」が発動する契機としての復員兵の帰還に焦点を当てて、彼を主人公とみなしています。

では、「武蔵野夫人」とは誰を指すのでしょうか。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

* 過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。